

札幌市立平和小学校の取組【環境：地域・外部人材活用】

1 研究のねらい

本校では、地域の特色の一つである『米作りの歴史』とそれに係る『環境』を、本校の特色ある教育活動の一つとして教育課程に位置付けている。5・6年生では、総合的な学習の時間に、『地域や学校の特色』について、テーマを設定して学習を行っている。

このテーマは、ここ数年、継続した取組となっており、テーマの設定については、地域の歴史が大きく関係している。この地域一帯は、札幌の米どころの一つとして栄えていった経緯がある。校区の歴史を紐解くとき、米作りは欠かせない一つの特色となっている。

そこで本研究は、学習を通じ、地域の歴史や環境を大切にし、未来に残していこうと考える意識と、将来の地域の担い手としての意識を育てていくことをねらいとする。

2 取組内容

(1) 地域の歴史を知り、地域との関わりをもつ

① 主体的な学びを生むために

本校では、5年生の総合的な学習の時間を中心として、米作りの学習を行った。苗は、毎年、北方自然教育園から提供されたものを使用している。

学習に関わっては、総合的な学習の時間だけではなく、理科、社会、家庭科などの学習時間を有効に関連させながら進めた。

単元の初めには、子どもが「なぜ、平和地区で米作りが行われていたのか」という問いをもった。子どもにとって、札幌市内、特に自分たちの住む町で米づくりが行われていたという歴史は、予想していない事実であった。子どもは、課題をもつことで、主体的に学習に取り組んだ。

② 地域行事の参加がより深い学びにつながる

本校の校区に隣接している五天山公園では、『水車で地域交流会』（水車で地域交流会実行委員会主催）が毎年行われている。この交流会は、西野地区で行われていた米作りを、後世に伝えていく取組として行われている。

五天山公園には、かつてこの地域に140基あった水車が1基復元されている。交流会では、子どもは、まず、西野地区の米作りの歴史についての話を聞く。140基もの水車があったという話は、子どもの驚きと疑問を生んだ。また、水車で行う精米作業を見学したり、実際に、瓶やすり鉢などを使って精米体験を行ったりした。

精米作業は、予想しているよりはるかに時間が掛かり、力が必要な作業である。実際に、手作業の精米を体験することにより、子どもは、水車で行われる精米の便利さを感じ、なぜ、この地域に多くの水車が存在したのかを考えることへとつながった。地域行事で体験した学びは、学校で進めている自分の学びと結び付き、子どもは、より深く学んでいった。

(2) 外部人材の活用を校内での学びにつなげる

① 体験活動を通じて感じたことを生かす

米の収穫時期に合わせて、地域にある、NPO法人「あそベンチャースクール」と連携し、外部講師を招いて羽釜体験を行った。例年、自分たちで薪を割り、火をおこして炊飯をする活動を行っているが、今年度は、雨天であったため、家庭科室での羽釜体験を行った。それでも、羽釜を初めて見る子どもにとっては、昔話の挿絵や歴史の資料でしか見たことのない羽釜を実際に使う貴重な機会となった。

講師の先生から、火加減についての説明を真剣に聞きながら、「まだ蓋を開けてはいけないんだよ。」など、炊飯を楽しむ様子が見られた。炊けたご飯は、学年全員で、家庭科室で美味しく食べた。



② 立場を変えて考えることで新たな思考が生まれる

本校でも、栄養教諭による『食に関する指導』が行われている。そこでは、『食の大切さ』や『食の楽しさ』について学ぶ機会となっている。本校児童の実態として、食べ物の選り好みや、偏食の傾向が見られる。給食では、メニューによって残量が多くなる日もある。

食の大切さと必要性を感じるには、『作り手の立場』に立つことも一つの方法である。「米を作った人や、料理を作った人は、どんなことを考えながら、それを作ったのであろう。」と、自分と立場を変えて考えることは、自分自身を客観視することにつながる。

外部の人材活用を、校内の教育活動といかにつなげていくかのヒントとなった。

3 成果と課題

(1) 成果

子どもが、身近な問題から課題をもち、学習に取り組んでいくことで、「なぜだろう。」と問い直すことや、外部人材との関わることで、主体的・対話的で深く学んだ。

自分自身を基にして考える学習に取り組むことは、他の学習の中でも転用できる思考を生み出すことになった。『生きた教材』の中で学ぶことの意味が、そこにあると考える。

子どもからは、「米作りを復活させたい。」「豊かな自然を守っていきたい。」という思いがまとめられていた。地域の歴史に目を向け、外部の人材や行事を活用することで、子どもの中に、郷土愛が生まれた。

(2) 課題

年間カリキュラムの中に位置付けられている学習ではあるが、外部人材や地域行事の活用が鍵を握るため、それらとの連携を図る必要がある。教師の側に、カリキュラム・マネジメントの意識と力がより求められることになる。地域人材の活用は、生きた学びにつながる。今後より一層求められていく学習活動であると考えている。